

## ローマ書13章8-14節 「キリスト者の義務」

### 1A 愛の律法 8-10

1B 愛の負債 8

2B 隣人愛 9

3B 愛による成就 10

### 2A 近づいている救い 11-14

1B 今という時 11

2B 昼の接近 12

3B 打ち捨てる闇の業 13

4B キリストの着用 14

## 本文

ローマ人への手紙 13 章を開いてください。私たちは 13 章の後半部分を学びます。

私たちは前回、「キリスト者の社会生活」について学びました。私たちはとかく、教会や個人的な信仰生活については、神が直接関わっておられて、関心を示しておられる、御心があると思っています。それはそうなのですが、教会から外に出ると、そこは神との関わりのない世界なのだと思いがちがあります。そして、福音は語るけれども、社会に貢献することは信仰とは関係のないことだと思っています。けれども、13 章 1 節には「神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられたものです。」とあります。ですから、上に立てられている権威、人間の制度と呼んでよいでしょう、それらに主にあって従うことは、主にお仕えすることそのものなのだ、ということです。教会生活や信仰生活が一方にあって、社会生活は他方にあるのではなく、どちらにおいても主に従っているのです。

そして、その従うことについてですが、上に立てられている権威については、消極的な意味合いがあります。それは、「恐れる」ということです。悪を行なう時に剣を持っていることを、パウロは説明しています。つまり、刑罰を加える権威が与えられている神の僕なのです。ノアの時代の洪水の後に、神が、悪が広がるのを抑制するのに人に人を裁く権限を与えられました。けれども、キリスト者としては「良心のためにも、従うべき」とあります。信仰は、良心と共に働くことを、学びました。14 章にて、パウロはこのことを詳しく話します。神が聖霊によって、良心に働きかけてくださいます。そして、立てられている人々に従うことについて、貢や税を納めることについてもそうだということです。「恐れなければいけない人を恐れ、敬わなければいけない人を敬いなさい。(7 節)」で言っています。

## 1A 愛の律法 8-10

このような姿勢が、キリスト者が社会において取るべきことなのです。そして、私たちキリスト者はさらに、もっと強い動機付けがあります。恐れる、敬う、そして良心に従うということも大事ですが、それに加えて、「愛する」という命令に。これこそが、キリスト者が最も縛られていなければいけない掟です。社会には、いろいろな掟があります。そして、聖書にも律法という掟があります。しかし私たちは、律法に従うように召されたのではなく、その律法が御霊によって心の板に書き記されたのであり、神がキリストにあって私たちの罪を赦し、清めてくださった、その愛に感動して、駆り立てられて、今度は神とキリストを愛し、従います。そしてキリストに従うがゆえに、隣人をも愛するのです。私たちは、社会がどんなに変わろうとも、世界がどのようになろうとも、互い愛し合うということについては、愚かにも従っていくのだということでもあります。そしてイエス様が、「それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。(ヨハネ 13:35)」と言われます。したがってパウロも、12章9-10節において「愛には偽りがあってはなりません。…兄弟愛をもって心から互いに愛し合い」なさいと勧めています。

## 1B 愛の負債 8

8 だれに対しても、何の借りもあってはいけません。ただし、互いに愛し合うことについては別です。他の人を愛する者は、律法を完全に守っているのです。

「だれに対しても、何の借りもあってはいけません。」というのは、必ずしも金を借りてはいけないということではありません。パウロが、貢や税を納めなければいけないという義務について話しているので、そういった義務を果たしなさいということです。「箴言 22:7 借る者は貸す者のしもべとなる。」とあります。私たちがそういった借りを作って、それに縛られるような生活であってはいけないということです。誰の奴隷にもなってはいけない、ということです。ただし、上の権威に従うことについては、しっかりと義務を果たしなさいということです。

けれども、納税するとかというのと異なる掟に縛られています。納税すれば、確定申告を済ませればそれで終わりです。けれども、「互いに愛し合うことについては別です。」とあります。私たちは、この掟について絶えず、頸木を負っており、その中に生きているのだよということです。要は、これがあるかないか？を絶えず、心の中で確かめないといけません。イエス様が弟子たちに言われました。「ヨハネ 13:34 あなたがたに新しい戒めを与えましょう。あなたがたは互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、そのように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」イエス様が私たちを愛された。その愛に留まり、そして同じようにして神に生まれた兄弟を愛します。その交わりの中で、さらには隣人、教会の外の人々にも神の愛を伝えます。言葉だけでなく、行ないによっても伝えます。

「他の人を愛する者は、律法を完全に守っているのです。」と言っていますが、私たちがしばしば

陥るのは、「何をすればよいのか、良くないのか」という御心探しです。たばこを吸ってはいけないのか、それは神の掟に反しているのかどうなのか？自分が何をしているか、していないかによって、神との関係を判断しようとする。それが律法の要求することですが、しかし、律法の本質は違います。申命記を読むとよく分かりますが、心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして主なる神を愛しなさいという命令があり、神がイスラエルを愛し、そしてイスラエルがそれに応答するという愛の契約なのです。キリスト者は、罪がキリストの血によって完全に赦されたというところに基づく新しい契約ですが、これもまた愛の契約です。日曜の礼拝は、どれだけ守ればよいのですか？という質問。献金はどれだけ捧げればよいのですか？という質問があります。それは逆に、「では、その回数だけ行けば行かなくてもよい。」「それだけの額を捧げれば、あとは捧げなくてもよい。」という意味になっています。そうすることによって、結局は心が神から離れていき、守っているようで全然守っていないようになるのです。

それとは異なり、「愛する者」はいろいろな律法の背後にある神の心を捉えているので、それらの掟を守っていくようになるのです。例えば、偶像礼拝を取り上げてみましょう。私はさほど、聖書について教えられることなく信仰を持ち、そしてバプテスマも受けました。その時は8月で、実家でお墓参りもありました。けれども、創造主である神以外に、他の神々があるがごとく話しかけ、香をたくことが恐くてできなかったのです。心が変えられていたので、それを避けていたのです。ですから、愛なんですね。そういうことで、「律法を完全に守っているのです」と言っています。

## 2B 隣人愛 9

9「姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな。」という戒め、またほかにどんな戒めがあっても、それらは、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」ということばの中に要約されているからです。

イエス様がこのことを語られました。読んでみましょう。「マタイ 2:35-40 そして、彼らのうちのひとりの律法の専門家が、イエスをためそうとして、尋ねた。「先生。律法の中で、たいせつな戒めはどれですか。」そこで、イエスは彼に言われた。「『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』これがたいせつな第一の戒めです。『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです。律法全体と預言者とが、この二つの戒めにかかっているのです。」パウロはここで、第二の戒めに焦点を合わせています。なぜなら、13章は社会生活の中での話題なので、人と人の関係に焦点を合わせているからです。隣人を愛しているなら、相手の性を神から与えられたものであること、また結婚というのは神の賜物であることを尊びます。だから姦淫の罪は犯しません。殺すなも同じです、その人が神のかたちに造られていることを知れば、人の命を取ることもしません。盗むことも同じですね、人の所有物は神がそれをその人に与えておられるのです。だから神を恐れ、その人を尊ぶので恐れません。

パウロは律法主義に陥っていたガラテヤの教会に対しても、同じことを言いました。「ガラテヤ 5:13-14 兄弟たち。あなたがたは、自由を与えられるために召されたのです。ただ、その自由を肉の働く機会としないで、愛をもって互いに仕えなさい。律法の全体は、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」という一語をもって全うされるのです。」律法を強調する人々は、福音にある自由について語ると、「そうすると放縦に陥る」と言います。何でもしていいことになるではないか、ということになります。いいえ、その発想自体が、まだ律法による関係の中に縛られているのです。愛の関係であれば、自ら罪を犯したいと思わなくなります。規則が与えられなくとも、神を愛して、隣人を愛しているがゆえに、それを行ないたくないと願います。だから、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」という一語をもって全うされる」ということなのです。

ここで「愛」というのが、何かふわふわしたような、気持ちのことであると思ったら間違いです。律法学者は、自分は隣人を愛しているという自信があったようです。イエス様が上の二つの戒めを語った後に、彼が、「私の隣人とは、だれのことですか。」と尋ねました。それでイエス様が、良きサマリヤ人の話をされました。サマリヤ人が、強盗に襲われて半殺しにされていたユダヤ人を憐れんで、介抱し、宿代も支払ったのです。祭司やレビ人はそのまま通り過ぎていきました。それで、イエス様が「だれが、強盗に襲われた者の隣人になったと思いますか。」と尋ねられました。彼は、「その人にあわれみをかけてやった人です。」と答えています。イエス様は、彼に対して優しく諭しておられますね。敵対関係にあるサマリヤ人が、自分たちが無視して歩いている人々の隣人になったのです。このように、愛は心から行なうものであり、具体的であり、手を汚すものであり、労苦するものです。手を汚し、労苦したら、それは心がきつく感じて、「愛ではない」という言葉を聞くのですが、その時は良きサマリヤ人の話を思い出してください。

### 3B 愛による成就 10

10 愛は隣人に対して害を与えません。それゆえ、愛は律法を全うします。

愛は、もちろん害を与えないだけでなく、良いことを行なうことです。イエス様が、「自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい。これが律法であり預言者です。(マタイ 7:12)」と言われました。けれども、今、十戒にある「してはいけない」という戒めに焦点を合わせているので、当然ながら、害を与えることはないということを話しています。

### 2A 近づいている救い 11-14

そして、パウロは一気に、このようなことを話している中で大事なことを語っていきます。

### 1B 今という時 11

11 あなたがたは、今がどのような時か知っているのですから、このように行ないなさい。あなたがたが眠りからさめるべき時刻がもう来ています。というのは、私たちが信じたころよりも、今は救い

が私たちにもっと近づいているからです。

「このように行ないなさい」と言っています。これは今の、隣人を愛すること、互いに愛するという事もあるでしょうし、そしてその前の権威に従うということもあるでしょうし、教会の中で賜物を用いて互いに仕えるという 12 章前半における勧めもあるでしょう。救いが近づいている、つまり主が再び戻って来られる時が近づいているのだから、だからこのように行ないなさいと言われます。私たちの教会では、聖書に書かれているように、終わりの日のことを強調します。それをことさらに強調したいからではなく、聖書に強調されているように強調しています。けれども、こうしたことを学ぶ時に、これまで読んできた勧めと別個にしてしまう傾向があります。主が来られるのが近いのであれば、自分自身を神に捧げます。教会で賜物を用いて仕えます。社会生活で、きちんと証を立てます。隣人を愛します。このように、つながっていなければならないのです。そして、そのようなことを行なっていくのに当たって、主が間もなく来られることを知ることが、さらなるキリスト者の愛の行ないの動機付けになるのです。希望を抱くことによって、聖霊によって神の愛が注がれます。

「今がどのような時か知っている」と言っています。「時」というギリシヤ語には、クロノスというのとカイロスというのがあります。クロノスというのは、私たちの知っている時間や時刻の事をいいます。そして、カイロスというのが「良い機会」ということです。機会がやってきた、ということです。例えば、ずっと天気が過ぐれなくて、桜がなかなか開花しなかったのですが、今日は特別に暖かかった、「これは花見の日だな」と分かって、今日こそ花見をする時だとして、弁当の準備をするというのが、カイロスです。ですから、多くの人が、終わりの日の出来事について日を設定したり、そういった時間で終わりの日を見ていく人が多いのですが、それは違います。そうやって見ている人たちの中から、終わりの日を待ち望まなくなる人たちが出て来ます。「二十年経っても、主は戻って来ないではないか！」と憤るのです。いいえ、そうではないのです、そのような時期になっているね、何かそうした兆しになっているね、だから、これらキリスト者ががしているように言われていることを行なっていきなさい、ということです。

「あなたがたが眠りからさめるべき時刻がもう来ています。」とパウロは言います。このことは、テサロニケの手紙第一 5 章においても話しています。「5:5-9 あなたがたはみな、光の子ども、昼の子どもだからです。私たちは、夜や暗やみの者ではありません。ですから、ほかの人々のように眠っていないで、目をさまして、慎み深くしていきましょう。眠る者は夜眠り、酔う者は夜酔うからです。しかし、私たちは昼の者なので、信仰と愛を胸当てとして着け、救いの望みをかぶととしてかぶって、慎み深くしていきましょう。神は、私たちが御怒りに会うようにお定めになったのではなく、主イエス・キリストにあって救いを得るようにお定めになったからです。」朝の十時になっているのに、まだ眠っている十代の子がいたとしたら、「ほら、起きろ！」と言いますね。そういったことです。私たちキリスト者が、これまでの勧めにあったことに気づいて、よく注意して見ていく時刻が近づいているのだよ、ということです。

「というのは、私たちが信じたころよりも、今は救いが私たちにもっと近づいているからです。」と言っています。この救いは、将来の救いです。私たちは過去に救われましたが、今もその救いの力が働いており、将来において完成します。「ローマ 5:9-10 ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。もし敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させられたのなら、和解させられた私たちが、彼のいのちによって救いにあずかるのは、なおさらのことです。」私たちは感じないでしょうか、自分が生きて来た中でも、終わりの日が近いという兆しが見えますね。主が戻ることについて、その兆しというものは一切必要はないのですが、しかし、大患難における災いの前兆のようなもの、それを指し示すようなことがあります。それを見ると、主が戻って来られるのが近いと感ずるのです。

## 2B 昼の接近 12

12 夜はふけて、昼が近づきました。ですから、私たちは、やみのわざを打ち捨てて、光の武具を着けようではありませんか。

何をもって闇なのか、そして光の武具なのか、次の節にも書いてありますが、パウロはエペソ 5章で語っています。「エペソ 5:3-14 あなたがたの間では、聖徒にふさわしく、不品行も、どんな汚れも、またむさぼりも、口にすることさえいけません。また、みだらなことや、愚かな話や、下品な冗談を避けなさい。そのようなことは良くないことです。むしろ、感謝しなさい。あなたがたがよく見て知っているとおりに、不品行な者や、汚れた者や、むさぼる者…これが偶像礼拝者です。…こういう人はだれも、キリストと神との御国を相続することができません。むなしいことばに、だまされてはいけません。こういう行ないのゆえに、神の怒りは不従順な子らに下るのです。ですから、彼らの仲間になってはいけません。あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。…光の結ぶ実は、あらゆる善意と正義と真実なのです。…そのためには、主に喜ばれることが何であるかを見分けなさい。実を結ばない暗やみのわざに仲間入りしないで、むしろ、それを明るみに出さなさい。なぜなら、彼らがひそかに行なっていることは、口にすることも恥ずかしいことだからです。けれども、明るみに引き出されるものは、みな、光によって明らかにされます。明らかにされたものはみな、光だからです。それで、こう言われています。「眠っている人よ。目をさませ。死者の中から起き上がれ。そうすれば、キリストが、あなたを照らされる。」」

## 3B 打ち捨てる闇の業 13

13 遊興、酩酊、淫乱、好色、争い、ねたみの生活ではなく、昼間らしい、正しい生き方をしようではありませんか。

遊興や酩酊は、節制に関することです。そして淫乱や好色は、性的な不道徳です。それから、争いやねたみは、高慢に関わること、そして敵意であります。これらのものを打ち捨てなさい、そし

て昼間らしい、正しい生き方をしなさいということです。このように主を待ち望むことは、正しい生活へと導かれるのです。「マタイ 24:45-51 主人から、その家のしもべたちを任されて、食事時には彼らに食事をきちんと与えるような忠実な思慮深いしもべとは、いったいだれでしょうか。主人が帰って来たときに、そのようにしているのを見られるしもべは幸いです。まことに、あなたがたに告げます。その主人は彼に自分の全財産を任せるようになります。ところが、それが悪いしもべで、『主人はまだまだ帰るまい。』と心の中で思い、その仲間を打ちたたき、酒飲みたちと飲んだり食べたりし始めていると、そのしもべの主人は、思いがけない日の思わぬ時間に帰って来ます。そして、彼をきびしく罰して、その報いを偽善者たちと同じにするに違いありません。しもべはそこで泣いて歯ぎしりするのです。」

#### 4B キリストの着用 14

14 主イエス・キリストを着なさい。肉の欲のために心を用いてはいけません。

脱ぎ捨てる、身に付けるという行ないです。「エペソ 4:22-24 その教えとは、あなたがたの以前の生活について言うならば、人を欺く情欲によって滅びて行く古い人を脱ぎ捨てるべきこと、またあなたがたが心の霊において新しくされ、真理に基づく義と聖をもって神にかたどり造り出された、新しい人を身に着るべきことでした。」私たちの目標は、キリストご自身です。この方を身に付けること、この方について行くこと。この方が目標です。

そして、「肉の欲のために心を用いてはいけません。」とあります。ここで私たちが、社会生活を歩む中での延長になりますが、私たちが愛に縛られているということ、そして権威に従っていくということもありますが、世に対しては身軽であるということがあげられます。思い煩いから離れる、世の富の誘惑から離れる、心を用いるところから離れるということでもあります。この三つが大事です、恐れ敬い、そして愛するという、それから世のことに心を用いないということです。